

洛東園 だより

■平成24年4月発行 社会福祉法人 洛東園
■発行責任者:木村晴恵
■〒605-0981 東山区本町15丁目794
■電話番号:561-1171 ■FAX:531-8372
■ホームページアドレス <http://www.wf-rakutouen.com>

ご挨拶 ～生～

社会福祉法人洛東園 特別養護老人ホーム洛東園 入居者ご家族

「雪の朝を 山茶花見つち認知症なる
母の優しき顔の浮き立つ」
「体力はなくとも 今年もみられし 天神の梅の花」

“生きる”このたった三文字に「響き」「苦しみ」「喜び」と、様々な想いが頭をよぎります。

ひょんな事から「洛東園だより」の原稿を依頼され戸惑っていますが、母が平成20年12月より、当園にお世話になっておりまして、少しでも恩返しをさせて頂きたくペンを執った次第です。

私たちが敬愛する洛東園は、昭和27年10月、大本山「東福寺」の緑豊かな自然に恵まれた地に、社会福祉事業の一環として、仏教精神に支えられた開園でした。

敗戦後、僅か7年、世の中混乱の中、介護に目をむけられるとは、何方が考えられたのでしょうか…見事です。山あり谷ありの還暦ではなかったでしょうか？

更に平成23年4月に「修道洛東園」が開設され、役

員の方始め、職員各位の「和」「縁」そして、地域との繋がりを大切にされた結果が、今日の繁栄に結び着いたのではないのでしょうか。

「生きる」事は、何人も人間だけではありません。「建物施設」も「生きて」いるのです。

改めて感謝の念を深く頭の下がる思いでいっぱいです。

人間“生きる”という事は大変な事です。

人生、楽しいことは三、苦しみは七とも言われています。人それぞれ、生きるために酷使してきた体は、老いていくほどに寿命が来る迄“生きる”から“生かされる”に変わります。

介護は聖職だと思います。誰しも青春の俤、老いを迎えたい。この理想と現実を温かい掌にすっぽり包んで下さる職員の皆様に、母を安心して委ねる側の一人として、この紙面をお借りして、厚くお礼を申し上げる次第でございます。有難う御座います。

洛東園の理念

- ◎個性・自主性を尊重し明るい温もりのある生活
- ◎安全と快適な暮らし
- ◎地域に根ざした開かれた施設

□ 地域包括支援センター 生きていく私たちにできること

昨年12月18日から23日の6日間、東日本大震災被災地(宮城県石巻市)にボランティア活動へ行った、洛東地域包括支援センターのN職員にインタビューをしました。

* * * * *

(聞き手) どのようなきっかけで、ボランティアへ行こうと思われましたか？

(N職員) 以前より、困難な状況に直面した方々の役に立てる支援をしたいと思っていたところ、日本社会福祉士会より、被災地において対人援助活動の支援要請がありました。

(聞き手) 被災地の印象はどうでしたか？

(N職員) 震災から約9ヶ月経過していて、再建された家や営業を再開している店舗などが目に付き、街中は活気を取り戻し、また避難所の被災者の方々は、防風扉の増設された仮設住宅へ移っておられ、復興が進んでいる印象でした。しかし、

被害の大きかったところは、焼け野原のような景色が広がっていて、改めて被害の大きさを実感しました。

(聞き手) 現地での活動状況を教えてください。

(N職員) 現地の稲井^{いない}地域包括支援センター職員と、仮設住宅で暮らす高齢者の方々を訪問しました。一見すると、どなたも落ち着いて過ごされているように感じましたが、家族を失い心身の状態も変わって居られる方々も多く、大きな悲しみを抱えて生活されていました。その際に収集した情報はデータ化され、稲井の支援センターで保管・管理されています。また課題が発見されれば、行政や医療機関などと連携して、その解決策を検討していきます。

(聞き手) この貴重な体験を、今後どのように仕事に活かそうですか。



おながわ
石巻女川地区の横転したビル



稲井地域包括支援センター職員の皆さんと



石巻市立病院付近の献花台

(N職員) 私たちのセンターは、「どこにどのような高齢者の方々が居られるか」をスムーズに把握するため、普段から人と人とのつながりを大切にする必要があると思いました。そのために集会場など人が集う場所を活用して、コミュニティを活性化させることが必要です。すべての人が生涯、社会の一員としてかけがえのない存在であり、それ

を忘れないことが重要と再認識しました。

* * * * *

掲載したインタビューや画像は、ほんの一部に過ぎませんが、これからも生きていく私たちにできることを考えさせられました。大変貴重なお話を、ありがとうございました。

■ 特別養護老人ホーム 洛東園

生きる道

人生には、一人ひとり違った『道のり』があります。特別養護老人ホームには、長い人生の道を歩んでこられた利用者さんがたくさんおられます。そこで、利用者さんお二人に『人生の道のり』についてお話を伺いました。

お一人目は、戦時中にご主人を亡くされ、娘さんを立派に育てあげた97歳の飯田さんです。お話を伺った際に「子供のために必死に働きました。今はのんびり暮らしたいです。毎日散歩に行き、お花を摘んで部屋に飾りたいです」と話されていました。入所されてからは、娘さんやお孫さん、ひ孫さんの面会を楽しみにされています。また、職員と共に大好きなお花を生けたり、散歩に行ったりと、ご自身のペースでゆっくりと過ごされています。

もうお一方は、ひとかた東山区で一人暮らしをされてきた山本さんです。「わがままな人生をしてきた。欲しいものは買って、行きたいところには行って

…自分の思うようにしてきたわ。あとは、若い人ともっと関わって、自分も若くなりたい」と元気にっぱいに話して下さいました。今も定期的に職員と一緒に買い物に出かけ、化粧品やお気に入りの服を購入されたりと、入所前と変わらずおしゃれを楽しんでおられます。

特別養護老人ホームでの新たな暮らしを支えていくとともに、これからの人生の道のりを、利用者さんのペースで共に歩いていけたらと思います。



飯田さん



山本さん

訪問介護 生活の進化



時代の流れに沿って、私たちの生活も目まぐるしく進化してきました。電化製品や電話など、指一本で操作できるものも多くなり、いつのまにかそれが当たり前となってきています。

医療に関しても、大きく進化してきています。在宅酸素療法やインスリン療法などを利用する事により、入院せずに住み慣れた家で生活し続けることも可能になってきました。

鈴木さん(仮名)は、慢性腎不全のため、就寝中に器械により腹膜透析(お腹の中の腹膜を利用して血液を綺麗にする方法)をされています。訪問看護師とヘルパーにより、透析液の混合(二つの液に分かれているのを一つにする)と排液(血液中の不要な老廃物)の処理をさせて頂いています。

「透析液は重とうて持てへんし、皆に助けて貰うてます」「寝ている間に器械が透析をしてくれるし、昼間の時間を自由に過ごせるようになって、喜んでいます」と話されていました。ご自宅では、昆布やちりめん山椒を作られたり、お友達が訪ねて来られたり、お食事に出かけられたりして有意義に過ごされています。

このように、医療や介護が進むことで、鈴木さんのような疾患をお持ちの方でも、住み慣れた自宅で自分らしく生活することができるようになってきています。私たちヘルパーも、利用者さんの在宅生活の一端を担っていることを、改めて実感しました。



■ 養護老人ホーム 洛東園と共に



養護老人ホームの朝は、体操から始まります。ラジオ体操の音楽と『洛東園の歌』が流れ、利用者さん各々がリズムに合わせて体を動かします。そこで流れる『洛東園の歌』は、昔、朝の体操のためにと、利用者さんが合唱した歌を録音したものです。

当時録音に参加された中西さんは、昭和55年11月に入所され、利用者さんの中でも一番長く暮らされています。今年1月の誕生日で100歳になられ、養護老人ホームの中でも最高齢の一人です。今年で入所31年目を迎えられましたが、生活の場は当時と同じ2階で、できることは全て自分で行っておられます。その中でも、針仕事を得意とされており、細い糸を針に通し縫い物を続けられています。また、庭にある植物に水をあげたり、雑草を抜いたり、毎日を活動的に過ごされています。

「庭の植物は、適度な水や雑草を取ってあげることで、枝を適度に切ってあげることで、大きく育っていく。誰かがやってあげなあかんのや」と、暑い時も寒い時も、時間を見つけては手入れをされています。

入所当時と変わらず、毎日を生き生きと過ごされている中西さん。今後も洛東園の養護老人ホームと共に、元気に笑顔を絶やさず過ごして頂けるよう、見守っていきたいと思います。

洛東園の歌

1. 春は涅槃の東福寺
秋はもみじの通天橋
自然の恵みに包まれた
私達の洛東園
2. 明治大正昭和の世
移り変わりの激しさに
耐えて今日まで生き抜いた
私達は元気です
3. 人の情に手を合わせ
互いに励まし助け合い
百迄生きる合言葉
毎日楽しく暮らしましょう

「鉄道唱歌」のメロディーに
合わせて歌ってみてください。

□ もみじの家

「その人の生活」を支える



もみじの家は、「小規模多機能」という、平成18年から始まった新しい形のサービスです。認知症の人が、住み慣れた地域で暮らし続けることができるように支援しています。「通い」「泊まり」「訪問」の全てをもみじの家が担い、慣れた職員が関わることで、利用者さんにも安心して頂けます。また、一つの事業所が全てを担うことで、通所や訪問についても柔軟な対応を行なうことができます。

昨年2月からご利用の小寺さん(仮名)を紹介します。

小寺さんは独り暮らしの女性です。離れて住む長男さんより「認知症になってきているようで心配しています。少しでも悪くならないようにして欲しいし、一人暮らしで閉じこもりがちになるので、いろんな人と話をしたい」との希望で、通所のみの利用を開始しました。初めは緊張気味で、職員から話しかけないと話されなかったのですが、今では率先して、食事の準備、後片付けの食器拭きのお手伝いなどもして下さっています。しかし一方で、朝食後の薬の服用を忘れることが多くなり、長男さんと相談し、9月頃から朝の訪問の利用も開始となりました。15分ほどの訪問時間で、薬が服用できたかの確認、ポータブルトイレの掃除を行っています。ご自宅に伺うと、「おはようございます。いつもすみませんね」と声をかけて下さいます。

ある日、小寺さんが「いつまでも自分の家で住んでいきたい。50年ぐらいあの家に住んでますしね」とお話しして下さいました。小寺さんの言葉は利用者さん皆さんの言葉だなあと感じました。利用者さんの送られてきた生活や、お一人お一人の気持ちを大切に、可能な限り自宅で暮らし続けられるよう、職員一同で支えていきたいと思っています。

■ 特別養護老人ホーム 修道洛東園

こだわりのある生活



修道洛東園は、ユニット型(10人以下のグループを1つの生活単位とする)の施設であり、全室個室となっています。その中で、利用者さんの生活習慣や好みを1つ1つ把握して、その方に合ったケアを行っています。これまで、長い人生を歩んでこられた利用者さんですので、たくさんのこだわりを持っておられます。

1階で生活をされている下田さん(仮名)は、几帳面な方で、ものを置く位置などもご自身で決めておられます。自宅で生活をされている時は、毎日朝と夕に仏壇へお参りをしていたそうです。入居されてからも毎朝、決まった方角に向かってお参りをされています。「これを毎日続けることで、強く生きていけます」と仰っていました。

また、3階で生活をされている後藤さん(仮名)は、お気に入りの品物がたくさんあり、愛用の入浴用品もそのひとつです。シャンプー、リンス、化粧水、乳液などはお気に入りのものを使用されているためか、お顔も艶々とされており、とても生き生きとした表情で毎日生活されています。おしゃれにも気遣い、外出できる日を楽しみにされています。

利用者さん毎に生活習慣が違いうように、こだわりのものやこだわり方が違います。そういったものを大切にして過ごして頂けるように、これからも支援していきたいと思います。



寄付順